谷田風土記 73

ＪＲ草薙駅開設功労者・杉山　幸作

いま県立大学生および付近一帯の人々が利用しているＪＲ草薙駅は、大正時代に地元住民の大変な努力があり、昭和になり、ようやく開設された駅なのである。明治44年、草薙信号所が置かれた。地域住民は、それを利用して『駅を開設しよう』と、熱心な運動を始めたのであった。

まず、大正十二年七月、有度村議会が『停車場設置』を決議し、公式に請願運動がはじまった。しかし、関東大震災（同年九月）のためそれは中断した。

『私財投じての運動』

翌十三年（1924）三月、第二期運動が始まった。このときの中心人物は、中の郷の杉山幸作（通称スギコウ）であった。彼は、その実現に全力をかけ、名古屋・東京の関係方面に始終熱心な陳情・請願をおこなった。また地域関係者も協力した。そのなかには、『ヤブキタ茶』で有名な杉山彦三郎もいる。

しかし、反対・妨害・邪魔するものも多く、さらに自分たちの利益のみを計ろうとするものもいた。なかには駅を東の『みかどだい』に持ってこようとするものもいたという。

『四月三日は草薙の日』

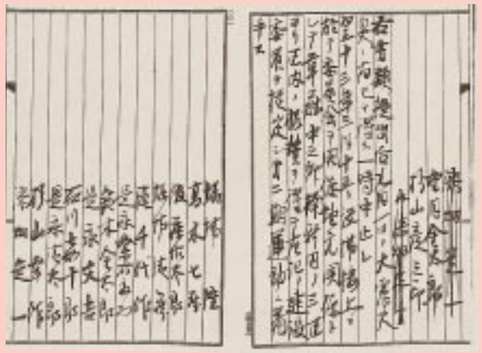
だが、私財を投じて地域発展のため尽力した『スギコウ』とその協力者の力により、大正十五年（1926）四月三日に『国鉄草薙駅』がついに開設されたのである。昭和五年には、一般営業もはじまっている。四月三日は『草薙の日』とも言えよう。これが今日の草薙一帯発展の基盤となったことは言うまでもない。

『スギコウ』は、家財を傾けるほどの運動をしたという。いま、そのときの『停車場設立運動日誌』『請願書』『申合契約書』などが残っているが、読み進めると大変な努力と私財・時間を投じたことが分かり、思わず涙が出るほどである。

『いまも尊敬されるご子孫』

中心人物・杉山幸作の墓は、県大の食品栄養科学部横の瀬名に行く道路を降りていく途中の『鳳林寺』にある。本堂正面すぐ右にあるのがそれ。ご子孫は静鉄『県立図書館・県立大学前駅』から県立図書館に行く『プロムナード道路』にある『サークルＫ』のそばにおられ、いまも地域の人の尊敬を受けているという。

（国際関係学部教授・高木　桂蔵）



「停車場設立運動日誌」の一部．杉山幸作（左二）．杉山彦三郎（右二）の名前も見える

電子掲示板で情報発信　＜4月から学内で運用開始＞

広報委員会において導入が検討されていた、学内向けの電子掲示板の運用が4月から開始されます。

電子掲示板は、学内ＬＡＮを利用し学内の教職員に全学的な情報を伝達するシステムで、全教職員が情報を掲示することができます。掲示板の運用、掲示方法等の詳細は、「電子掲示板取扱要領」に定められています。

掲示内容としては、各種イベントの開催・参加者募集、特別講演会等の紹介、受賞・研究助成の紹介、人事異動、各委員会からの決定事項等のお知らせ、クラブ活動等の結果紹介（県大会で入賞した！）、アンケートへの協力依頼、事務局からの各種お知らせ、などの全学に発信したい情報が考えられます。

掲示板に掲載された情報については、本学から記者クラブやミニコミ誌等への情報提供、或は本誌への掲載の情報としても活用できるものと期待されています。

教職員の皆様には、電子掲示板の導入が学内情報の大量流通の起爆剤となり、これまでに全教職員に伝わらなかった情報が、多量にかつ早急に伝達することができますよう電子掲示板の運用にご協力ください。

学内ニュース「はばたき」への掲載について

掲載希望がありましたら、事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）あてに原稿をお寄せください。

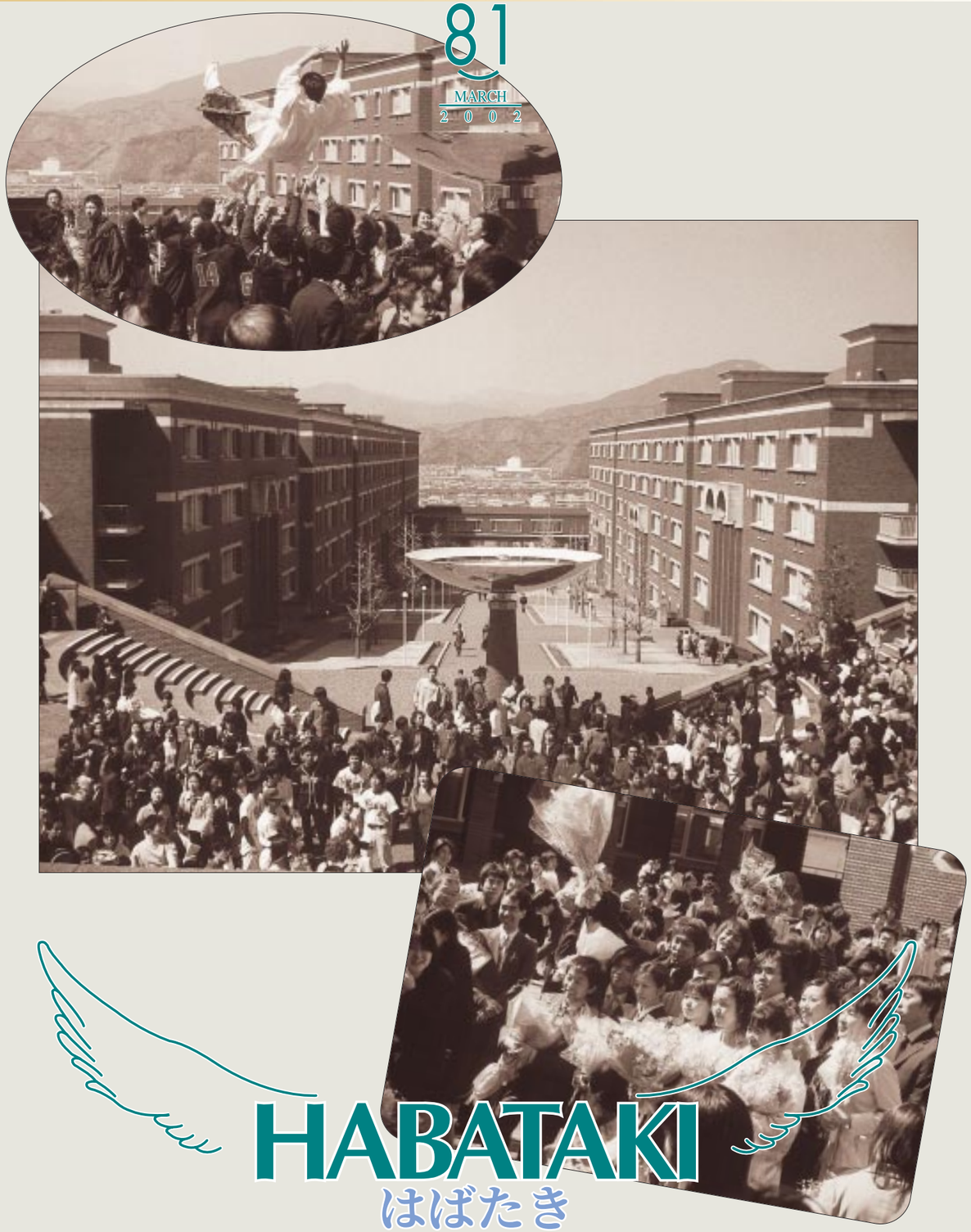
Ｅ－ｍａｉｌ：ｋｉｊｏ４@ｇｍ．ｕ－ｓｈｉｚｕｏｋａ－ｋｅｎ．ａｃ．ｊｐ

企画・編集　静岡県立大学広報委員会　ＴＥＬ　０５４－２６４－５１０３

静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

volume 81
MARCH 2002



HABATAKI
はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA
52-1 Yada,Shizuoka-shi shizuokaken422-8526 Japan

inside NEWS

平成13年度　静岡県立大学卒業式式辞

静岡県立大学学長　廣部　雅昭

平成13年度静岡県立大学学部卒業式、大学院学位記授与式が平成14年3月19日に本学大講堂で行われた。石川静岡県知事をはじめ多数の来賓の出席のもと、廣部学長が式辞を述べた。

＜卒業式式辞＞

本日ここに石川静岡県知事はじめ多数のご来賓、ご父兄の方々のご臨席をいただき、静岡県立大学平成13年度、学部卒業式ならびに大学院学位授与式を盛大に挙行できますことは真に喜ばしいことであり、関係者一同心から感謝を申し上げる次第です。

蛍雪の功なり、本日卒業を迎えられた５学部495名、大学院研究科修士課程116名、博士課程10名の皆さんに対し、大学を代表して、まず心からのお祝いを申し上げたいと思います。またこの日を心待ちにされ、喜びを分かち合っておられる、全ての卒業生のご家族の方々のこれまでのご苦労、ご支援に対しましても、心から感謝を申し上げたいと存じます。

さて、世界中のすべての人々が、平和と繁栄を心から願い、スタートした新しい21世紀も、最初の一年が終わって見れば、期待とは裏腹に世界は益々混迷の度を深め、前世紀末の喘ぎを、そのまま引きずっている憾があります。特に昨年９月の国際テロによるニューヨークの世界貿易センタービルの崩壊と、一瞬にして数千名の命が奪われた惨状をテレビを通じ、リアルタイムで見た時の筆舌に尽くしがたい衝撃は、世界中の人々に「あり得ないことが、起こり得る」ことを強く印象づけました。報復戦争も泥沼化の様相を呈し、新しいタイプの戦争の恐怖に世界は震撼としております。

一方我が国も長引く不況などにより、まさかと思われる大型企業の相次ぐ倒産や、真に有効な方策も見出せないままに「木を見て森を見ない」議論ばかりが目に立つ‥‥そんな社会の現実に、人々は「それでも、まあ何とかなるのでは‥‥」という長い間の護送船団依存型発想の甘さに気づき、苛立ちと、不安感、焦燥感に駆られているのではないでしょうか。「こうなったら自分達の力でなんとかしなければ‥‥」という危機意識、発想の転換、積極的な行動力が、今の時代には特に必要ではないかと思います。ＮＧＯ，ＮＰＯなど、様々なボランティア活動もその現れの一つと見ることが出来ますが、今更社会の混迷の責任を互いに転嫁し合って見ても、所詮問題の本質的な解決にはなりません。今私たち一人一人が、主体的に何が出来るのか、何をなすべきかを真剣に考えないと、予想もしない事態が次々と起こりかねない‥‥そんな気がしてなりません。

大学を取り巻く世界も例外ではありません。最も安泰と思われていた国立大学ですら、生き残りをかけて、統合・再編の上、法人化されるという、まさかと思われることが現実になろうとしております。時代の急速な変化に適切に対処して来なかった“つけ”が廻って来たという思いです。

このような先行き不透明で厳しい社会に巣立って行く皆さんは、これまでのいろいろな意味での護送船団依存体質から脱皮して、自分の力で生き抜いて行く強い覚悟が必要であります。現在完全失業率が６％にも及ぶ不況の世の中で、若年層の割合が非常に高く、その理由が就職後１～２年での離職によるものとの深刻なデータがあります。将来どのような仕事をやりたいのか、明確な目的意識がないままに社会に出たためのミスマッチと、社会の厳しい状況に耐えられない自分自身の弱さに起因するものと思います。本学の卒業生にはそのような傾向は少ないと一定の評価は得ておりますが、卒業後の進路変更などについては、自身の判断と責任で行い、他に依存しない、それだけの強い自立感が必要であります。

卒業される皆さんに対し、社会は大学でどれだけの実力と教養を身につけ、また人格を高め得たか、そしてどれだけ社会に役立ってくれるのかということに期待をかけて注目しております。かつて私は卒業する学生諸君に「大いに背伸びをしなさい」と言ったことがあります。社会が期待をもって迎えてくれるならば、「虚勢を張っても自分を大きく見せよ」ということであります。その上で“仮面”が剥がれて恥をかかぬために、ひそかに実力をつけるべく自身懸命の努力をすれば、いつの間にか虚像が実像に変わり、本当に大きく成長するものであります。「立場が人をつくる」というのもその類いの事であります。バブル的評価が先にあって、実力が後からついて行く場合、その自覚と努力さえあれば、必ずや社会の評価に堪える人物になり得ると思うからです。自らを“窮地”に立たせ、あるいは“退路”を断って、そこからはい上がる努力をすることで、本当の“生きる力”が身につくことになると思います。失敗しても挽回するチャンスの多い若い人達の特権として、私は敢えて「背伸びをせよ」そして「速やかに帳尻を合わせるべく努力せよ」ということを申し上げたいと思います。

皆さんが大学でどれだけの実力を身につけ得たかということは、在学中にどれだけ自覚をもって学んだかにより千差万別であると思いますが、大学教育も長い人生の中では一つの通過点であり、真の実力、教養なども生涯をかけて涵養すべきものであります。近年“教養教育”論議が盛んで、つい最近も中央教育審議会から“新しい時代における教養教育の在り方について”という答申がなされました。幼年期・少年期、そして青年期から成人に至るまで、どのように教養を培って行くべきかという指針のようなものであります。確かにそこに盛られている内容は、尤もなことばかりで、私がこれまで卒業式や入学式などで話したことも全て含まれているほど当然のことばかりのような感じがいたします。問題は家庭や教育の現場でも、これまで観念的には理解されながら、何故結果として教育の荒廃を招いたのか、その原因と背景に対する検証が十分でないような気がいたします。

そもそも“教養”とはなにかという問いに対して即座に明確な答えの出せる人は少なく、十人十色の答えがあると思います。かの新渡戸稲造博士は“教養”とは、「学校で学んだこと全てを忘れてしまった後に残るもの」と言われたそうでありますが、なかなか含蓄のある言葉であると思います。

私たちは生きるために様々な食物を摂取しますが、それらに含まれる栄養素が血となり肉となって身体が出来上がって行きます。私は人間の“教

養”についても同じことが言えると思います。これまで受けた様々な教育、また家庭や社会における様々な体験などを通じて身についた全人的素養が“教養”であり、人様々であってしかるべきものであります。問題はどれだけ質の良い、食欲をそそる、あるいは食して美味いと感ずるメニューが提供されたか、またそれを十分咀嚼し、自身の栄養にしているかであると思います。これまでのように無理やり口に押し込むような食事の与え方では、拒否反応が先に立ち、却って栄養不良になっているような気がいたします。飽食の時代といわれる所以であります。

自ら進んで食する意欲、つまり知的欲求がわくのは、文字通りハングリーな状況におかれた時であり、そのことによってハングリー精神も芽生えるのであります。先程「大いに背伸びをせよ」と言ったのも、自己を高めるために自ら進んで学ぶ状況を作り出すためなのであります。現在社会人をどの大学も受け入れるようになりましたが、この人達はしっかりとした目標と、積極的に学ぼうとする意欲があるので目の輝きが違います。学問は日進月歩で最新の知識や技術などを習得することも必要になって来ており、大学が生涯学習の場として、このような人々に門戸を開くことは極めて大切なことでありますが、皆さんも卒業後いろいろな機会をとらえて自己研鑽に努めるべきであると思います。

また人間の知識というものも、全く知らない事と、知っていたが忘れてしまったこととは違います。一度学んだことは忘れていても“きっかけ”を与えれば思い出すことができるものです。これも体得した“教養”の一つであると言えます。そして、いわゆる常識といわれる範囲の知識は、高等学校レベルまでに習得したはずのもので十分であると思います。私は皆さんに、暇を見て“ひそかに”かつて使用した中学、高校の教科書をもう一度読んでみることを勧めたいと思います。教科書は常識のエッセンスであり、年の功も手伝って、非常に理解しやすく、しかも新鮮な感覚で記憶によみがえり、短期間で生きた常識として復活する筈です。そして新たな知識などは、読書によって、またインターネット等により、広範に吸収出来る時代であれば、あとは生涯をかけて“教養”を高める努力を自分自身の意志で行うべきであります。その努力の有無が各人の“実力”の差となって社会から評価をうけることになるのであります。

これから大学院に進学する皆さんには、大学院の入学式であらためて申し上げますが、それぞれ

志望する専門分野で、高度職能人として、あるいは研究者として社会に通用し得るように、さらに高度な学問を究めなければなりません。修士課程では先端的な知識、技術を習得するために教育のウエートが従来以上に増して来ると思いますが、個々の知識もさることながら、その背景となる本質的な事柄や全体を把握することが、より重要であります。学際分野を含め幅広く学び、豊かな発想の原動力として頂きたいと思います。

言うまでもなく全人的教養は、知識のみで形成されるものではありません。精神面との豊かな調和が必要であります。これまでいわば護送船団の庇護のもとで過ごして来た皆さんにとって、社会の風は冷たく、厳しく感じられると思います。特に現在のように、あらゆる面で社会全体がゆとりを失い、目標が定まらず混迷しきった時代にあっては、人心も荒廃し、自己中心的な風潮の蔓延、陰湿な嫌がらせ、ねたみ、誹謗中傷なども横行しておりますが、人間の真価はこのような「逆境」におかれてこそ発揮されるものであります。またそれに耐えることが出来た人間は、決して自分の味わった苦痛を人に与えるようなことはしないもので、思いやりと気配りの出来る、しなやかな人間として大きく成長するものであります。「艱難汝を珠にす」という先人の言葉はまさに名言であります。逆境に耐えることで強い精神力や豊かな人間性が養われる・・その意味では現在は格好の時代環境と言えるのではないでしょうか。

おわりに本学に学び、このたび卒業を迎えられた学部14名、大学院９名、計23名の留学生の皆さんに心からのお祝いと激励を申し上げたいと思います。母国を離れ、異国の地で勉学生活を送る苦労は並大抵のことではありません。言葉のハンデ、文化や生活様式の違い、中には生活のためにアルバイトを余儀なくされた人達も多かった筈です。現在のような不況下にあってはなおさら大変であったと思います。しかしこれら諸々の苦労を克服し、多くのことを学び、生涯の友人もつくり、充実した達成感を抱いて帰国され、将来日本そして静岡との交流の架け橋になって下さることを心から願っております。また留学生の皆さんに温かい理解と援助を惜しまれなかった地域の多くの方々に対しましても、改めて深く感謝を申し上げたいと存じます。

厳しい時代に、社会に巣立つ卒業生の皆さんに対し、「護送船団依存型の体質から脱皮し、自分の力で活路を見出せ」「大いに背伸びをせよ」「中学・高校の教科書を読み返せ」「逆境に耐えよ」などと、世の識者も、ましてや中教審の答申の中などでは述べられていない型破りのことを敢えて申し上げましたが、その意図する所を十分理解して頂きたいと思います。

現在の混迷した社会は、旧来の価値観や意識が、グローバル化時代への社会構造の急激な変化に適合出来なくなった“あがき”の現れと見ることが出来ます。このような時代を救えるのは君たち若者に期待される柔軟な発想とバイタリティではないかと思います。
若い世代がもっと建設的な大きな声を上げ、またそれが反映されるような世の中にならなければ、少子化に向かう我が国の明日はないと思います。国際的視野を広め、社会を変革する強い自覚と気概をもって大いに研鑽努力し、社会の負託に応えて頂くよう心から期待いたします。
皆さんの新たな門出にあたり、お祝いとともに熱烈なエールを送り、私のはなむけの言葉といたします。

ご卒業おめでとう。

環境科学研究所の動き

環境科学研究所長　相馬光之

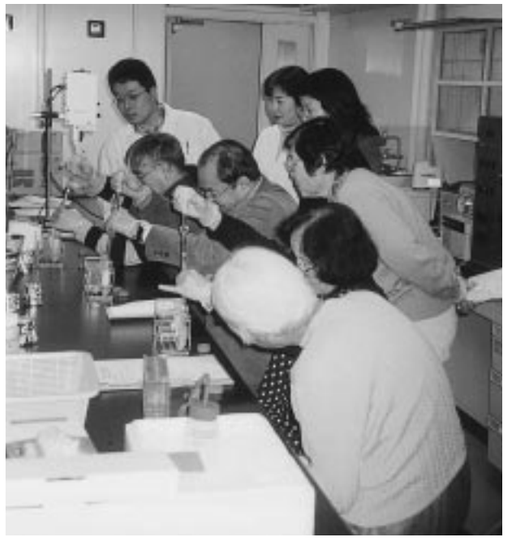
環境科学研究所はこの３月で開設５年を迎えます。現在国公立の大学で環境の名をつけている附属研究所は４つありますが、環境の、ある分野に特化していない名を持つのはわが環境科学研究所だけです。総合科学としての環境科学に真正面から取り組むべきこの名を、最も規模の小さいこの研究所が負っていることは、私たちにとって大きな挑戦です。

研究所の教員は全員が大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻の担当を兼ねています。平成13年の春には、専攻開設以来の２教授が定年をお迎えになり、下位香代子助教授と橋本伸哉助教授が、それぞれ、生体機能学・生態化学研究室の新主任教員として着任しました。研究所は、これから数年間断続的な世代交代の時期になります。

13年度は研究所の活動のうち「一般公開」「環境学習サポーター養成講座」「環境研究交流しずおか集会」を大学の創立15周年記念事業として企画しました。県民の日行事ともしている研究所の一般公開は8月19日（土）に行われ、266名が研究所を訪れました。各研究室が工夫したデモンストレーションには延540名から面白いとの反応を得、特に環境工学研究室の「水をきれいにする」は好評でした。アンケート回答者183のうち、研究所をこれまで知らなかった人が28%、環境物質科学専攻を知らなかった人が56%で、大学院の活動をより広く知ってもらう必要を感じました。幸い、研究所と専攻の内容を融合したパンフレットが最近できあがりました。一般公開に併せて、新しい試みとして、小学校の先生に環境教育の実際に役立ててもらう目的で、「環境体験実習」を2日間行い、延13人の先生が参加しました。

「環境学習サポーター養成講座」は県教育委員会が開催している県民カレッジの一講座として、研究所のスタッフが担当して4年目になりますが、今年度は県教委との共催として実施されました。7研究室の主任教員が講師を担当し、研究所で開催した地の利を生かして、1回（全11回）は各担当研究室による実習を行い好評でした（写真）。受講者は57名で、東は裾野市、伊東市、大仁町から西は浜松市、雄踏町まで、県民カレッジの講座の中でも際立って広い地域にまたがっており、環境学習への県民の関心がうかがわれました。

環境科学研究所では所内の廊下沿いの掲示板に研究室の内容を紹介して、学内外の方々の訪問を歓迎しています。



環境学習サポーター養成講座：DNAを見る

静岡県立大学短期大学部の動き

短期大学部部長　田中丸 治宣

静岡県立大学短期大学部は、昭和２６年５月静岡市に設立された静岡女子短期大学を前身としています。その後、昭和４３年に静岡市から浜松市に移転し、昭和６２年に旧県立大学の統合整備が行われる中で、静岡薬科大学、静岡女子大学とともに静岡県立大学に統合され現在の短期大学部として浜松で開学いたしました。また、平成９年に浜松キャンパスから移設した第一看護学科、第二看護学科並びに新設された歯科衛生学科及び社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）の４学科からなる静岡キャンパスが開設されてから５年にわたり、静岡キャンパスと浜松キャンパスの２つのキャンパスに分かれた体制でありました。しかし、多くの人材を輩出してきた浜松キャンパスの文化教養学科及び食物栄養学科は、平成１３年３月に最後の卒業生を送り出し、平成１３年３月３１日をもって廃学科となり浜松キャンパスは学び舎の幕を閉じ、短期大学部は静岡キャンパスに一元化いたしました。

それに伴い一般教育等の教員１２人が浜松キャンパスから静岡キャンパスに転入し、教養科目のさらなる充実が図られました。具体的には、これまでは一般教育等の教員は浜松校での講義の日には静岡校に来ることができず、静岡キャンパスの学生は講義日以外にこれらの教員と会うことが困難であったが、これが解消されたことが学生にとって最も有意義なことであると考えられます。また、一般教育に関わる実習室等の管理運営の充実も図られております。さらに浜松キャンパスの附属図書館から静岡校へ約1万5千冊の図書が移管されこれら図書のデータ登録を順次進め、平成１４年２月には全ての登録を終了し、検索、閲覧及び貸し出しができるようになっております。

看護学科の学内実習

短期大学部の公開講座は、静岡県立大学公開講座の一環として行われておりますが、短期大学部では本年度は静岡小鹿会場において、社会福祉学科が担当し、「少子高齢社会の中で地域に生きる」をテーマに開催いたしました。この開催に際し、保育期の２０代から３０代の社会人が参加しやすいように、講演の時間に就学前の幼児をお預かりして保育を行いました。これは、社会福祉学科の学生達の手伝いによるものであります。利用人数は多くはありませんでしたが、ご利用いただいた方々には大変好評でありました。

短期大学部としては、18歳人口の減少、高学歴志向の高まりなどの一般的な社会情勢の変化に加え、県内高等学校における准看護師養成の廃止による第二看護学科入学者供給源の減少、歯科衛生士養成の年限延長の検討、短期大学卒業者の就職要件など個別に考慮すべき問題もあり、短期大学部の将来構想について、今後早い時期に具体的な検討が必要と考えています。

静岡県立大学特別公開講座を開催

テーマ「人間といのち―いのちを脅かすもの・守るもの」

本学は、県民に開かれた大学として、生涯学習の機会の提供、地域文化の向上に貢献していくため、昨年度に引続き、静岡新聞・SBS静岡放送と共催で「特別公開講座」を実施します。

○場　所　　しずぎんホール・ユーフォニア（静岡市呉服町　アゴラ静岡8階）

○募集定員　高校生以上 450人（先着順、８回分一括申し込み）

○受講料　　8,400円（高校生は、半額の4,200円）

○申込先　　静岡新聞社・ＳＢＳ静岡放送「県大公開講座」係

○申込に必要な項目　　郵便番号、住所、氏名、生年月日、職業（高校名）、電話番号、ＦＡＸ番号

○申込方法　はがき　　〒422-8680 静岡市登呂３－１－１

　　ＦＡＸ　　054-284-9031

○問い合わせ先　静岡新聞社・ＳＢＳ静岡放送事業局　TEL 054-284-8920

○講座内容

	開　催　日	担　　当			テ　ー　マ
第１回	２００２年 ５月１８日(土)		廣部雅昭	学長	プロローグ
		看護学部	西垣　克	教授	いのちの危機管理
		薬学部	中野眞汎	教授	いのちを守る医療薬学
第２回	６月２２日(土)	薬学部	増澤俊幸助	教授	ヒトの歴史より古い病原微生物
		看護学部	土井まつ子	教授	院内感染を考える
第３回	７月１３日(土)	薬学部	鈴木康夫	教授	ウイルスの脅威
		食品栄養科学部	木苗直秀	教授	身近にある発ガン物質
第４回	８月１０日(土)	食品栄養科学部	小国伊太郎	教授	ピロリ菌やガンに対する「お茶」
		環境科学研究所	五島廉輔	教授	いのちを守り脅かす：放射線と光のはたらき
第５回	９月７日(土)	環境科学研究所	寺尾良保	教授	次世代への負の遺産：環境ホルモン
		経営情報学部	影山喜一	教授	いのちを脅かす経済：企業の生死と人間の生死
第６回	１０月５日(土)	国際関係学部	平岩俊司	助教授	東北アジアの安全保障
		国際関係学部	津城寛文	教授	“死後生命”への関心
第７回	１１月９日(土)	国際関係学部	玉置泰明	教授	環境・生命・文化―人類学の眼から
		経営情報学部	湯瀬裕昭	講師	災害時の生命線：情報通信システム
第８回	１２月７日(土)	看護学部	西垣　克	教授	パネル・ディスカッション “いのちを守るために、どれほどの努力が必要なのか”
		経営情報学部	北大路信郷	教授	
		国際関係学部	平岩俊司	助教授	
		薬学部	鈴木康夫	教授	
		生活健康科学研究科	木苗直秀	教授	

就職活動を終えて

国際関係学部　4年　　平野裕里加

私にとって「就活」は充実した学生生活のひとつです。今は笑って言えますが、努力と比例しないのが就活の辛いところでしょう。私自身、決まらない進路に苛立った一人です。人事担当者とも話が合い、万全で進んだ最終面接でも結果はついてきませんでした。

夏のおわり、地元大学で見つけた求人票が縁で、ある会社の採用過程を受け始めました。初めて素直に自分自身を伝えられた会社でもあります。帰り道、思わず嬉し泣きをしていました。「自分にあった会社ってあるんだ。また頑張っていこう」。決心してから一ヵ月。私はこの会社から内定を頂きました。

自分が求めている業界でなくとも、自分の可能性を信じ、時には方向転換する大切さを学びました。忙しい仕事の合間に話を聞かせてくださった県大OB･OGの皆さん、共に就活で泣いた友達。いつも応援してくださった社会人の先輩の皆さん、ありがとうございました。４月から、新社会人としての生活がスタートします。私の可能性に賭けてくれた会社と一体何ができるのか。楽しみです。

国際関係学部4年　中野宏美

私は4月から静岡県の職員となります。大学2年の頃に心を決め、3年の前期までに卒業に必要な単位を取り、後期から公務員試験の勉強に専念しました。それから約１年、不安と疲労の日々でしたが、終わって振り返れば何ということはないという気がして、今後のどのような試練にも前向きに立ち向かっていける自信がつきました。

また試験を通じ、「人との出会い」の大切さを強く感じました。家族や友人の存在や先生の言葉など、どれか一つでも欠けていたら頑張ることができなかったと思います。さらに県立大学に在学していたおかげで、県の職員の方々の仕事にも直接触れられ、お話を伺えたのはとても幸せでした。改めて感謝の思いでいっぱいです。

公務員という夢が叶ったことに加え、このような体験をすることができたことを更に嬉しく思っています。これからもどのようなことからも学んでいく心を持ち、県職員として頑張りたいと思っています。

就職スタッフからのコメント

「内定をいただきましたー」と声を弾ませて報告に来る学生、「最終面接で不合格になりました」と肩を落として中間報告に来る学生、「自己ＰＲ・志望動機が書けないと」と相談に来る学生など、様々な問題を抱えている学生の皆さんと喜び、悔しがり、話し合い、考え合いながら共に就職戦線に立ち向かっています。この２人とも何回も語り合いました。合格の報告を受け嬉しかった瞬間は今でも忘れません。途中でくじけそうになっても自分で何とか努力し、本当に粘り強く活動してきたことを知っていたからです。

就職活動はつらいと思えばつらくもなりますが、考える視点を変えることで楽しくもなります。まず、いろいろな人との出会いを楽しむことです。今日の採用担当者はどんな人なのか、どんな新しい発見ができるのか等、多くの人々とのふれあいの中から学ぶことが沢山あります。

内定をいただいた時、出会ったすべての人に感謝することができたことが、人間として成長した「証」になります。

学生に与えられた就職活動というチャンスを最大限に活用し、自分に合った職業を見つけ出してください。

強い骨を作ろう！ー剣祭イベント報告ー（その２）ー

看護学部助手有志（健康増進研究会）

前号に引き続き、剣祭イベントとして本学学生・周辺住民等約200名を対象として実施した骨密度測定およびアンケートの結果を報告する。（なお、骨量とは骨の中のミネラル量をいい、骨密度とは単位体積内の骨量をいう。）

１．年齢・性別と骨密度

一般的に、骨量が最大となる時期は男女ともに20～30歳代で、この時期以降骨量は直線的に減少していくと言われている。骨量に影響する因子としては、内的要因として、遺伝、加齢に伴う内分泌系（女性ホルモンなど）の変化や、骨代謝の変化すなわち骨を作る「骨形成」＜骨を溶かす「骨吸収」などであり、外的要因としては、体重負荷、栄養摂取、運動習慣、生活習慣などである。骨量の減少パターンには性差があり、女性では閉経を機に急激な減少が起こり、その後減少速度は鎮静化するのに対し、男性では女性のような急激な減少を示す時期はなく、加齢とともに緩やかに減少していく。

＜今回の結果＞

図１は、対象のOSI（音響的骨評価値）の散布図と標準値カーブの図である。この標準値カーブは、今回使用した測定機器の付属データを基に、各年齢の標準値を示しているものである。男性は、対象者数が35名と少ないが、OSIは20歳代においては半数以上の者が、その他の年代ではほぼ全員が標準値カーブより下に分布している傾向にある。女性においても、70歳代以上を除いては、全体的にOSIは、標準値カーブより下に分布しており、本来ピークボーンマス（最大骨量）といわれている20～30歳代が極端に低い。

以下では対象数の多かった20歳代女性の結果を中心に報告する。

２．体格・運動と骨密度

骨は重力や筋力によって、圧縮・引っ張り・曲げ・ねじれの力を受けている。これらの刺激は骨代謝活性化を促進し、骨密度の低下を抑制したり、骨密度を高くしたりすることがわかっている。ヒトは立っているだけで重力に逆らっているため骨に刺激を与えているが、BMI（体格指数：体重÷身長の二乗、すなわち体の面積あたりの重さ）の大きい人の方が、同じ生活をしていても骨密度が高い傾向がある。また、運動は筋肉を動かし、骨は筋肉につながっている腱から刺激を受けることにより、運動部位付近の骨密度が増加するといわれている。

＜今回の結果＞

BMIと運動習慣の結果を表1に示す。BMI低値群と標準群では、運動習慣ありの方がOSIが高い傾向にあり、先行研究にもあるように運動は骨密度を高める効果があることが考えられる。しかし、BMI高値群では、運動習慣なしにも関わらず、BMI低値群と標準群で運動習慣ありの人よりもOSIが高かった。体格は日常生活活動においては常に骨への刺激要因となるため、体格が肥満に分類される人はOSIが高かったと考えられる。ただし、今回の測定ではBMI高値群で運動習慣ありの人がいなかったなど、対象数が少なかったのでこの結果を一般化することはできない。

３．食事と骨密度

骨は、タンパク質（コラーゲン）などの有機基質とリン酸カルシウムなどの無機質を主成分として形成されている。骨量の増加・維持には、骨の主成分であるカルシウムが必須である。その他にもタンパク質、ビタミンD、C、A、K、ミネラル類、その他の機能性成分（イソフラボン）など、多くの栄養因子が骨代謝に関係している。従って、日常の食生活において、これらの栄養を過不足なく摂取することが重要である。

＜今回の結果＞

今回は、牛乳・乳製品、魚類、大豆製品の摂取頻度について調査を行った。若い世代の独り暮らしでは、魚類、大豆製品の摂取頻度の低さが目立った。一方、手軽に摂取できる牛乳・乳製品の摂取頻度は高く、カルシウム不足を意識しているとの声もあった。どの食品の摂取頻度も、20歳代では男女ともOSIとの相関は見られなかった。骨量を高く維持するために、牛乳・乳製品だけでなく、大豆製品や緑黄色野菜を毎日欠かさずに、さらに魚介類や海草類も積極的に、摂るようにしたい。

次号では、今回のイベントの中で好評を得た、栄養指導と運動指導について紹介する。

図1　OSI(音響的骨評価値)の男女別散布図と標準値カーブ

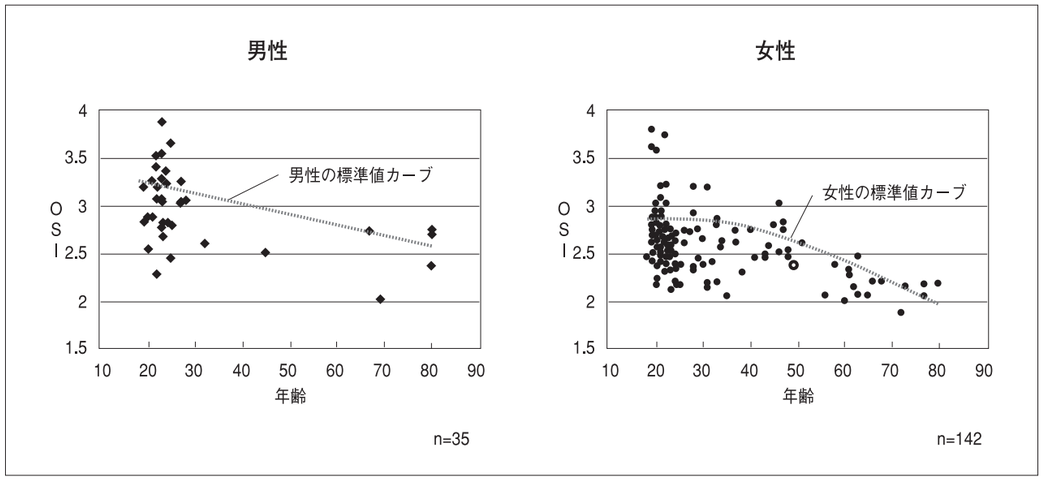


表1 20歳代女性のOSI平均値（現在の運動状況・BMIとの関係）

現在の運動状況	BMI 低値（18.5未満）“低体重”	BMI 標準(18.5以上25未満)“ふつう”	BMI 高値（25以上）“肥満”	全体の平均
あり	2.8 ± 0.2 (4)	2.8 ± 0.4 (26)		2.8 ± 0.4 (30)
なし	2.6 ± 0.3 (14)	2.6 ± 0.2 (47)	2.9 ± 0.5 (3)	2.6 ± 0.3 (64)
全体の平均	2.6 ± 0.3 (18)	2.7 ± 0.3 (73)	2.9 ± 0.5 (3)	2.7 ± 0.3 (94)

Mean±S.D. (　)は人数 n=94

図書館だより

システムが新しくなります！

◎入退館システムの変更（平成１４年４月～）

＊図書館に入館する際には、利用者カードが必ず必要になります。

・入館時…図書館の利用者カードをカードリーダに近づけるとゲートが開きます。

・退館時…今までどおりです。貸出手続きを忘れるとゲートが開きません。

◎図書館コンピュータシステム

１　ＯＰＡＣ（蔵書検索システム）の変更（平成１４年５月～）

・端末機を新館各階に設置します。これまでの本館８台とあわせ１４台となります。

・インターネットを利用したＯＰＡＣになり、今まで以上にスムーズにできます。

・ 静岡県立中央図書館、静岡大学附属図書館及び浜松医科大学附属図書館の蔵書の横断検索並びに国立情報学研究所を通じて全国の大学図書館の蔵書を、本学の蔵書検索画面から検索できるようになります。

・雑誌の最新号の入荷状況がＯＰＡＣで確認できるようになります。

２　文献複写依頼等の手続きについて（対応準備中）

・他大学等への文献複写依頼、図書貸借依頼がＯＰＡＣからできるようになります。（学内ＬＡＮ接続のパソコンからならどれからでも可能になる予定です。）

本学教員からの著書寄贈　先生の著書を寄贈していただきました。

《 本学教員著書 》(平成13年11月以降)

◎小浜裕久教授（国際関係学部）

・ 世界経済の20世紀　　日本評論社　2001年　　共著

（請求記号　509.21/Ko 21/ ：2階閲覧室配置）

◎ 大澤孝幸助教授（国際関係学部）

・ 小説理解の方法：行間をどう読むか　石川書房　2001年　共著

（請求記号　901/O 74/ ：１開閲覧室配置）

◎ 北大路信郷教授（経営情報学部）

・公共部門評価の理論と実際　日本加除出版　2001年　共著

（請求記号　317/Ｆ 73/ ：２階閲覧室配置）

◎ 小島茂教授（経営情報学部）

・ 人間関係のなかの自己分析　東京図書　1998年

（請求記号　146.1/Ko 39/ ：１階閲覧室配置）

シリーズ電子ジャーナル（３）

本学では、次の2種類の電子ジャーナルが利用できます。これらは学内LANに接続した端末からのみ利用できるものです。

①冊子体購読誌とセットで提供されている電子ジャーナル

冊子版を購読すると無料で利用できる電子ジャーナルについて、購読者番号を通してIPアドレスを出版社に登録し、学内から利用できるよう手続きしたものです。100誌以上のタイトルについて電子版が利用できます。

②Oxford University Press(OUP)刊行の電子ジャーナル（試験提供）

OUPと国立情報学研究所との共同事業として提供される電子ジャーナルで、昨年度に引き続き、平成14年度も継続して利用できます。OUP電子ジャーナルのほぼ全タイトルが提供されていますが、一部公開が停止されるものがありますのでご注意ください。

この他フリーサイトで提供されているものもあります。どんな雑誌が提供されているか、一度試してみてください。

①HighWire Press（http://highwire.stanford.edu/lists/freeart.dtl）

アメリカのスタンフォード大学図書館が主催するE-Journalシステムで、フリーサイトで全文が見られるタイトルが含まれています。

②J-STAGE（http://www.jstage.jst.go.jp/ja/）

科学技術振興事業団が提供する科学技術情報発信・流通総合システムで、国内で発行される自然科学・技術関係の学会誌等が、一部を除き無料で閲覧できます。

③PubMed Central（http://www.pubmedcentral.nih.gov/）

National Institutes of Health が生物医学論文を無料で提供するサイトです。

ではこのシリーズの最後に、電子ジャーナルの抱える課題について整理しておきます。

まず、大きな課題としてあげられるのは、遡及へのアクセスとデータ保存の問題です。電子ジャーナルの購読を中止した場合、冊子体なら購読していた期間のバックナンバーは手元に残りますが、電子ジャーナルの購読は、出版社のサーバーにアクセスする権利を得るということであり、契約中止後もバックファイルにアクセスできるのかどうかは重要な問題となります。一方、電子ジャーナルのバックファイルの保存に誰が責任を負うのかという問題もあります。個々の出版社が永続的にバックファイルを保存する責任を引き受けているわけではありません。

このような制度的､技術的な問題については、問題解消に向けた対応がみられるようになってきました１）が、このほか購入に関する問題もあげなければなりません。まず、電子ジャーナルの価格がかなり高額であることと、様々な種類のサービス・パッケージがあり、価格との関係を把握しにくいということがあります。価格の問題に関しては図書館コンソーシアムを形成し、共同契約することによって、より有利な条件で電子ジャーナルを導入するのが国際的な動きとなっています。また、学内の購入経費と費用分担の問題もあります。電子資料はこれまでとは異なる形態・性質をもつものであり、予算措置、経費負担の方法、また雑誌選択のあり方についても見直しが求められると思われます。

このように電子ジャーナルの導入にはいくつかの課題がありますが、今や電子ジャーナルは、学術研究基盤として不可欠なものになってきました。本学における研究基盤形成のため、電子ジャーナル導入に向けた本格的な取り組みが必要とされています。

（注）坂上光明. 電子ジャーナルをめぐる最近の話題. 楡蔭-北海道大学図書館報.　No.108. p.3-4.2000.12

研究助成金の採択

第18回（平成13年度）（財）総合健康推進財団研究奨励助成

「緑茶アミノ酸 Theanine による肝臓保護作用と肝障害予防効果」

佐塚　泰之　薬学部　助手

夢は逃げない・逃げるのは自分
―先輩からのメッセージー

藤木慎介　栃木SC（JFL）所属

Q：県立大学から初のJFL（ジャパン・フットボール・リーグ）選手になられたということで、今の心境はどうですか？

A：正直にいってJFLに昇格したといっても思うように試合に出られず、サッカーが楽しくないと思ったこともありました。けれど、そういった時期に自分を信じて努力を続けてきた結果、JFL昇格、そして栃木SCに入団する事が出来たと思っています。

Q：栃木SCのテストを受けようと思ったのはどういった理由からですか？

A：念願だったJFLには昇格したのですが、プロフェソール宮崎で自分はどれだけチームに貢献できたのだろうかと、自分の中で納得いかない部分がありました。そのときちょうど雑誌でテストのことを知り、チームのオフとも重なったので、自分を納得させるのと自分の本当の力を知りたいと思い、JFL栃木SCのテストを受けることを決めました。

Q：そして120名の中から見事合格されたわけですが、合格したときはどんな心境でしたか？

A：二次審査の翌日監督から直々に電話があり、「うちにないものがある」と言ってくれたときは、心にグッとこみ上げるものがありました。これでやっと、胸を張ってJFLだと言えると。

テストの方は、一次審査から二次審査には30人ほど通過したんですが、全国からJFLを夢見て集まった精鋭ですから正直どうかなと思いました。ちょうど前に痛めた左足の痛みが再発して満足に歩けず、テスト中は「早く終わってくれ」と思ってました。

Q：学生時代の話を聞きたいと思います。サッカー部に所属され３年生の時には、キャプテンをやられていたそうですが、どのような思い出がありますか？

A：大学１年生の頃、僕が入部したとき、サッカー部は東海大学リーグの４部でした。試合をやっても負けることの方が多く、メンバーもなかなか集まらず３人で練習をやったこともあります。けれど、僕らの世代は非常にまとまりがあって、「このままではいけない」、と上の世代や自分たちでもよく話し合いをしていたので、次第にチームとして一つになっていきました。１年生の時は惜しくも３部に昇格できなかったんですが、２年次に３部に昇格、キャプテンをやった３年次に２部に昇格する事が出来ました。

Q：キャプテンをやって辛かった、逆に嬉しかった思い出ははありますか？

A：県立大学の部活動では、監督がいなかったため、グランドの確保から練習メニューを考えたり、会議に出席したりと忙しかったのを覚えています。他に雨の日なんかに、練習にあまり部員が集まらないときは、キャプテンをやっていて自分の力が足りないのかと辛かったです。けれど、そんな時でも集まった部員のために雰囲気を盛り上げて、他の部員まで気持ちが下向きにならないように気をつけていました。それで、１年生の時には練習試合さえしてくれなかった静岡大学や静岡産業大学と４年生になって試合をやるようになり、勝った時はそれまでのことを考えて、本当に嬉しかったです。自分がキャプテンをやっていた時には、マネージャーも含めて、部員が50人もいたこともあり、試合になかなか出られない部員に、気を配ることが出来てなかったと反省しています。それと顧問の中田先生には、研究で忙しい中、暇を作ってはグランドに顔を出してくれ大変感謝しています。

Q：サッカー以外ではどんな学生だったのですか？

A：あまり真面目な学生ではなかったかもしれません（笑）。けれど、色々なサークルやイベントには積極的に参加しました。周りに行動的な友人が多かったこともあって、ボランティアに参加したり、駿府マラソンを走ったり、学園祭ではダンスを踊ったり、友人とアコースティックギターのライブをやりました。それと、勉強はどうかわかりませんが、よく本は読みました。

Q：卒業後ブラジルにサッカー留学したわけですが、ブラジルに行くことに迷いは無かったのですか？

A：僕も、４年生になり就職活動をしました。文章を書くのが好きなので、マスコミ関係を志望していたんですが、たまたま最初に受けた大手出版社に内定を頂きました。けれど、最終面接で担当の方に言われたんです。「サッカーに対する未練は無いんですね。だったら、そのサッカーに対する情熱をうちの会社に欲しい。」と。その時に考えました。本当にこれで良いのか？自分のやりたいことなのか？自分は何が一番好きか？何をしているときが一番自分らしいか？考える時点でもう未練があるんですけどね。ちょうどその時に、サッカー部のコーチをやってくれていたブラジル人のマルコスが、「ブラジルでチームを紹介するから一緒に来ないか？チャンスある。」と言ってくれたんです。親に相談したら、「行けばいいじゃない。」と。それで行く事を決め、内定を丁重にお断りしました。

Q：それでブラジルに行ったわけですが、向こうでの生活はどういったものでしたか？

A：結局、部活の友人、先輩と三人で行ったんですが、仲のいい友人達が成田空港まで見送りに来てくれて。感激と同時に「これはただでは帰れない。」と気が引き締まりました。

4年時、最後の試合後　東海大学サッカーリーグ

２年生の時に、一度夏休みを利用してブラジルに行ったことがあったので、わかっていたつもりでしたが、向こうでの生活は厳しいものでした。サッカーに関しては、日本人というだけで、パスがもらえないし、酷いヤジが飛んできます。落ち込んでは開き直る毎日でした。特にチームのコーチに嫌われていて、練習に参加させてもらえないこともありました。あるときウォーミングアップでバスケットボールをやることになったんですが、５人ずつ６チーム。僕を入れて人数がちょうど良いのにも関わらず、「ジャパ！お前はやらなくて良いから見てろ！」と僕が入るはずのチームに代わりにコーチ自ら入って、僕は外でそれを見てたことがあります。他にも、日本人３人対ブラジル人25人でボール回しをやらされたこともあります。そんなこともあって、絶対に見返してやろう、負けるもんかと、午前、午後の練習とは別に自主練習をやってました。

サッカー以外でも色々とありました。ブラジルはサンパウロ州だけで半年に1000人もの警察官が殉職するような危険な街です。だから日本人は特に、夜は外に出られない。３メートルの壁に囲まれた刑務所のような寮に住んでいたんですが、それでもシャツとか色々なものを盗まれました。夜寝る時には、窓に鉄のシャッターを閉めて寝ます。それでも時々、石を投げつけられたり誰かが窓を激しく叩くんです。でも最後の方は慣れて構わず寝てましたけど。

逆に向こうでの生活で一番の楽しみが、手紙でした。普段は手紙なんて書かないのに暇があれば

書いてました。昼間練習やって、夜外に出られないからそれくらいしかやることがないのもありましたけど。手紙を出して返事が来る。ブラジルは地球の裏側だから、ちょうど地球を一周するわけです。本当に待ち遠しい。手紙が届くと、それがどんな内容でも、本当に嬉しい。何十通も手紙をもらいましたが、辛いことがあると読み返す。どんなに辛くても、まだ頑張れると、気持ちを強く持てたのはそのおかげです。

こんな事ばかり言うと、ひどい国だと思われるかもしれませんが、一人ひとりの心は本当に暖かい。会ったばかりでも、家族のように接してくれるんです。そう感じる度に、日本人として、とても恥ずかしい気持ちになりました。

そんなことを経験したおかげで、サッカーももちろん上達しましたし、なにより、精神的にタフになりました。

Q：そしてブラジルから帰国し、宮崎に行くことになった経緯は？

A：ブラジルから帰ってきてから、Jリーグ（J1、J2）の下のJFLのチームを探したんですが、将来、上を目指しているチームがあると雑誌で知り、実家（福岡）も九州なので行くことにしました。

Q：それで、前述のとおり今に至ると。

A：そうです。静岡FCのアンドレ監督からも誘ってもらったんですが、知らない土地に行くのも勉強になると思って宮崎に決めました。ただ、こんなにうまくJFLに行けるとは思っていませんでした。「目的を持って進む強い意志には偶然が微笑む」父が言った言葉ですが、自分を信じて努力を続けたからこそ、今があると思っています。

Q：最後に県立大学の学生にコメントをお願いします。

A：僕の経験からアドバイスをすると、何事に対しても積極的になって欲しいと思います。色々なことを学生時代に経験して、「将来何をやりたいのか」「どういうふうに生きていくか」曖昧な夢や目標を明確にするのが学生時代だと思います。ただアルバイトをしたり、何となく授業を受けていたのでは、時間がもったいない。資格を取ったり、海外

ブラジル渡航前、成田空港にて友人たちと

に留学する人もたくさんいますが、それだけで天狗になっていては、先は見えてきません。そこで学んだ経験を、どうこれからの人生に活かしていくか。そちらの方が大切だと思います。それと、簡単に目標や夢をあきらめないで欲しい。僕もブラジルに行く前、「大学卒業してまで行くのか」「無駄だからやめとけ」と心ないことを言われたり、笑われたりもしました。一緒にブラジルに行った友人達もそれぞれワールドカップ通訳、本部長賞までもらう警察官になり、今も頑張っています。常識や体裁を気にせず、笑われるようなことでも真摯になって努力を続ければ、きっと人は認めてくれます。「夢は逃げない、逃げるのは自分。」あとは情熱が自分の行き場所を決めると、僕は思います。

Que vida boa（よき人生を）！静岡県立大学の皆さんのご活躍を願っています。

藤木慎介プロフィール

栃木SC（サッカークラブ）所属　背番号19

ポジション：フォワード、ウイング

96年４月　静岡県立大学国際関係学部入学
　　サッカー部入部
　　(シェイクスピア劇部、コーラス部、アコースティック部、FC草薙DiBiaggio、月下暇人にも所属)

98年11月　東海大学リーグ３部優勝 ２部昇格　　創部初

99年７月　静岡県選手権準優勝　　創部初

　　11月　東海大学リーグ２部得点王　創部初

00年３月　静岡県立大学国際関係学部卒業
　　卒業後、ブラジル、サンパウロ州２部プロリーグ“ハジュンFC"にサッカー留学

創造力啓発コンテスト学長講評

―創立15周年記念事業企画＜学長企画＞

今回のコンテストは、若い人達の“知的好奇心”を呼び起こし“創造的な知的活動”へと発展させることを目的として企画したものである。創造力を啓発するには、日常生活の中で、常に創意工夫を凝らす習慣が大切であり、そのために日頃自ら実践しているアイデアから、実用化を目指す高度な発明に至る作品、企画を募集した。今回は初めての試みでもあり、応募者が少なく、該当する優秀作品はなかったが、着想が面白く、実現性のある2点につき特別アイデア賞を授与した。本企画は今後も継続したいと考えているので、日頃から構想を練りチャレンジして欲しい。

＜特別アイデア賞＞（賞金2万円）

○「学内におけるリサイクルネットワークの構築」　長谷川明良（国際関係学部４年）

○「21世紀やかん“トッキィー”」　斎藤　翔太（国際関係学部２年）

東海道４００年祭（静岡県主催）・優秀賞受賞

この度、私の研究室、草薙ネットが、おかげさま、静岡県主催の東海道４００年祭（１９９９．１～２００１．１２）にて、エントリーした「東海道５３次考える犬プロジェクト」で優秀賞を受賞いたしました。内容は、考える犬石像の建立、考える犬の商品開発、考える犬のミニチアによる回遊性ルートづくり、考える犬のマップとハンカチの制作、考える犬ウォークラリーなどの地域おこしです。こうした地域おこしは東海道５３次４００年祭のイベントのためにおこなったというよりおこなっていたらエントリーの誘いを受けそのまま継続してきたものですが、いずれにせよ一研究室でできたことではなく学生はもとより地域ぐるみの協力があってできたことです。

とくに昨年の夏休み中、体調を崩して入院し、プロジェクトの継続が危ぶまれたときに、地域の小学生たちがおもしろいといって騒ぎはじめ、子供たちに背中を押されながら最後はなんとか完走できたという感じです。その意味で、今回のプロジェクトは大学と地域の連携によるまちづくりも大きな成果でしたが、地域の大勢の子供たちに喜んでもらえたことがもっとも大きな成果であり喜びでした。

なお、その後、プロジェクトに協力してくれた店舗や小学校に、賞状を縮小カラーコピーし店名や学校名を併記したものを贈呈させていただきました。

草薙ネット・代表　　小島　茂

外部資金（奨学寄付金・共同受託研究費）に係る事務費負担

奨学寄付金及び共同受託研究費については、平成１４年度の受け入れ分から、受け入れ額の５％を事務的経費として負担していただくことが、３月７日に開催された大学経営会議において承認されました。

この経費については、奨学寄付金及び共同受託研究費等の産学連携推進関連の事務を迅速かつ効率的に処理すると共に、産学連携のより一層の推進を図るために活用されます。

平成14年度大学院ビジネス講座　春期受講生募集

本講座は、平成13年度からオープンし、社会で活躍している方々のために、経営、情報通信技術、行財政などの分野において、高度で専門的、実務的な知識・技術を習得できるプログラムを展開しており、平成14年度の春期受講生を次のとおり募集します。

○申込資格　　大学卒業同等以上の学力のある方、社会人としての実務経験のある方
○申込受付期間　　平成14年3月25日（月）～4月12日（金）
○申込方法　　申込書、履歴書、受講希望理由書を郵送または持参する。
○受講料　　１科目につき　27,600円
○申込・問い合せ先　　事務局学務スタッフ（054-264-5008）
○開講科目

地方財政政策論	（月曜日夜間）	ブランド戦略とマーケティング・コミュニケーション	（土曜日午前）
ベンチャー・ビジネス	（金曜日夜間）	企業マネジメント	（水曜日夜間）
ＩＴビジネス論	（火曜日夜間）	マーケティング・リサーチ	（土曜日午後）

浙江大学方一新教授来学

県立大学と学術交流協定を結んでいる浙江大学から方一新教授が、２月１５日来日した。
方先生は国際交流事業による浙江大学からの派遣教員として、３月末まで滞在する。

方先生は浙江大学人文学部において古代漢語の研究・教育を行っており、本学では、滞在中、「日本における漢語史の現状」をテーマに、図書館での資料収集、文献の調査、教員とのディスカッション、関係機関への訪問等により研究活動を進めた。

本学の受入れ担当教員は嵯峨隆国際関係学部教授が務めた。

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（ＭＧＩＭＯ）から、短期交換学生交流事業による派遣学生３名が２月初旬に来日し、３月末まで滞在する。

学生は国際関係学部４年のボンダレンコ・アレクサンドルさん、同4年のエリセーエフ・セルゲイ・アレクサンドロヴィッチさん、国際経済学部4年のマカーロヴァ・クセーニアさんで、清水市内のホストファミリー宅にそれぞれホームスティし、日本の家庭で生活しながら、本学では島田国際関係学部助教授らのもとで日本語や日本文化の勉強を続けている。

短期交換留学制度による学生受け入れは今年度で５年目となり、モスクワ国立国際関係大学からの留学生は、今年の留学生３名を加えて合計１３名となっている。

クラブ・サークル紹介

剣　道　部

私達剣道部は毎週３回（月・火・金曜日）の練習を体育館の２階で行っています。
剣道部員は、中学、高校からやっていた人や、大学に入ってからやり始めた人など様々で、それぞれの各部員がそれぞれの目標、目的（強さを求める人、運動不足解消のため等）を明確に持って練習に励んでおり、各部員の自主性を重んじるのが県大剣道部の気風です。年間の活動内容は盛りだくさんなのですが、特にみんなが力を入れているのは、７月の関西薬学生剣道大会（今年は京都で開催される予定です）や、１１月の東海薬学生剣道大会です。これらの大会ではみんな入賞を狙って臨んでいます。他にも９月の東海学生剣道大会（団体戦）などが主な大会です。（大会名に薬学生とついていますが、どの学部の人でも出場できます。）その他、新入部員歓迎会、忘年会、卒業生追い出しコンパ、花見等様々なイベントもおこなっています。みんな楽しい人ばかりで、部での打ち上げは毎回大盛り上がりです。初心者、経験者問いませんので気軽に見に来て下さい。

コーラス部

コーラス部は現在、２５名あまりで火・木・土の週３回活動を行っています。
コーラス部の主な活動は、４月の新入生歓迎祭での発表、６月に他合唱団体と曲を披露し合う「合唱の集い」、１１月の剣祭での発表などがあり、そして１２月に定期演奏会で、１年間の集大成を発表します。また様々なイベントに参加したり、歌う機会が沢山あります。

去年は、清水港祭りや東海道四〇〇年祭祝祭劇「佐久夜」のコーラス隊に参加したり、クリスマス聖歌隊として静岡の街中を歌い周ったりしました。

メンバーは、ほとんどがコーラス初心者ですが、ボイストレーナーの先生に指導を仰ぐ事により、個人の持ち味を生かした美しい歌声を引き出してもらい、また歌うことの奥深さ・楽しさを実感していきます。

取り組む曲は、最近流行りのポップスのアカペラから、古典的な宗教曲まで様々です。活動外でも、歌いたい曲があれば有志で集まり、練習するという光景がよく見られます。また、どこでも歌うことをためらいません。道端で歌い、合宿先の風呂場で歌い、飲み会の居酒屋で歌い…。とにかくメンバーは皆、歌うことが大好きなのです。